

陸前高田市

クリップ

令和元年8月6日付 2面

魅力発信通じ心の復興を デジタル公民館けせん 始動に伴い情報交換会 陸前高田で (別写真あり)



▲「デジタル公民館けせん」事業が始動し、気仙両市の7団体が情報交換



東京都の一般財団法人高度映像情報センター（AVCC、久保田了司理事長）は本年度、デジタルメディアを活用して気仙の魅力を発信し、住民らの心の復興を後押しする「デジタル公民館けせん」に取り組む。このキックオフミーティングが4日、陸前高田市小友町の気仙大工左官伝承館で開かれ、東日本大震災後にAVCCが復興支援事業などでかかわる気仙両市の7団体が参加。情報交換を行い、今後も交流を図りながら気仙全体に取り組みを広げる機運を高めた。

AVCCは通信ネットワークやコンピューターといった高度映像情報メディアの利用と提供に関するコンサルティング、民設民営のデジタル公民館「霞が関ナレッジスクエア」事業などを展開。震災後は大船渡市末崎町の末崎地区公民館を拠点に、ネットワーク環境の整備、パソコン・スマートフォン教室の開催、竹とんぼ教室などの地域活動支援に取り組んできた。

令和元年度は、県による「被災者の参画による心の復興事業」の採択を受け、気仙全域で取り組む「デジタル公民館けせん」事業を実施。地域コミュニティの形成や地域振興などを図っていくこととした。

キックオフミーティングは同事業にかかわる気仙の関係団体が一堂に会し、これまでの取り組みや今後の方向などを語り合おうと企画。

末崎町から同地区公民館、PC・スマホ教室、多世代交流施設・居場所ハウス、どこ竹三鷹in まっさき、碓石地区復興まちづくり協議会・浜の停車場プロジェクトチームが、陸前高田市からは気仙大工左官伝承館と、広田町の一般社団法人・長洞元気村が参加。AVCCのスタッフらも含め、30人余りが会した。

冒頭、AVCCのシステム企画部チーフコンサルタント・葛西章広さんがあいさつ。デジタル公民館けせんの趣旨説明も交え、「各団体で情報を連携し、気仙全体を盛り上げるために知恵を出し合いたい。互いの情報を持ち帰って活動の参考にし、次回以降につなげられれば」と述べた。

このあと、参加団体の代表らがこれまでの取り組みや課題、今後の目標などを発表。

このうち、AVCCが拠点を置く末崎地区公民館の新沼真作館長は、国の支援事業も生かしながら進めてきた「デジタル公民館まっさき」などの取り組みを紹介。「活動による人と人との交流によって、地域もわれわれももの見方が変わり、地域の課題を自分たちで解決しようという考えなどが身に付けられた。今後は互いの団体のいい部分を吸収し合っていければ」と語った。

ほかの団体も、「新事業の始まりを機に、取り組みの場を広げたい」「デジタル公民館けせんを通じ、地域の宣伝力を高めたい」などと、活動の発展に期待を込めながらスピーチ。各団体の取り組みにも理解を深めた。

情報交換会は年に3回開くこととしており、次回は12月に長洞元気村で予定。AVCCは今後、各団体と連携をしながらデジタル公民館けせん事業として、パソコン・スマホ等利活用のサポート、ホームページ連携、竹とんぼ教室等の開催、防災教育、気仙大工建築物など地域の魅力の情報発信等を推進。コミュニティの形成と交流を通じて地域の魅力を世界へ発信し、被災者の心の復興を目指していくとしている。